

## 明治維新时期外様分家大名における隣藩関係

### ―七戸藩を事例に―

青森県民生活文化課県史編さんグループ 中野渡一耕

本報告は、明治二年に成立した盛岡藩南部家の分家大名、七戸藩（一万石）の隣藩関係について分析するものである。同藩の前身は江戸在住の旗本で、文政二年（一八一〇）に大名に昇格したが、長らく特定の領地を持たず、宗家から蔵米を支給される存在だった。戊辰戦争後に宗家に連動して一〇〇〇石減封されたが、この際ようやく領地が設定された。七戸藩の支配地は盛岡藩が減封された後の旧領の一部で、管轄がめまぐるしく変わる既存権力の空白地帯であった。

かかる成立事情をもつ七戸藩は近世期には領地支配の経験はなく、いかに支配を円滑に行い、隣藩関係を築くかが喫緊の課題であった。本報告は三つのテーマからみていく。まず、宗家盛岡南部家との関係で、近世期から強いコントロールを受ける立場だったが、この繋がりには継続し、藩政の重要な局面において宗家の意向を伺っていた。藩の幹部も盛岡藩出身者だったが、藩医や藩校教授なども盛岡藩からの派遣を仰いでいた。次に、宗家どうしで対立感情があった津軽家とは、同じ分家の立場にある黒石津軽家と友好を確認する使者の往来をしている。中央集権化を進める政府のもと、近世以来の意識は払拭せねばならなかった。七戸藩同様、維新後に成立した斗南藩とは、境杭の設置、渡船場の管理など、新しく藩境が出来たことによる様々な協議が発生した。

このような隣藩関係は近世以来の慣行を残しているのもあれば、新時代ならではのものもあった。七戸藩はわずか二年余りの藩政であるが、このような近世から近代への移行期、明治新政府下の諸藩がどう隣藩関係を構築していったかをみてみたい。